

令和7年度 会派調査研究報告書

(視察先 1 か所につき 1 枚)

会派名	葎真クラブ		
出席者	宮川文憲・清水康雄・田原一孝・内藤正之・木内吉英・山本京子・石河一郎		
事業名	塩尻市市民交流センター「えんぱーく」について		
事業区分	①研究研修②調査		

1. 葎崎市での課題と研修・調査の目的

塩尻市市民交流センター「えんぱーく」は、図書館、子育て支援、産業支援、市民活動の機能を備えた複合施設であり、市民の学び・交流・創造を促進する拠点として広く注目されている。 葎崎市にも類似する複合施設「ニコリ」が存在するが、その運営方法や市民との関わり方、空間の使い方には改善や発展の余地もあると感じている。えんぱーくは、柔軟な企画運営や、利用者の自発性を促す場づくりにおいて先進的な取り組みを行っており、公共施設の可能性を広げている好例である。 本視察では、こうした施設設計や運営方針、行政と民間の役割分担、利用者との関係構築などについて学び、今後の本市の施設運営やまちづくりへの活用を目的とした。
--

2. 実施概要

実施日時	令和7年6月26日（木）13:30～15:30		
視察先	塩尻市市民交流センター（えんぱーく）について		
担当部局	塩尻市市民交流センター 矢澤館長		
報告内容	1. 概要		
	塩尻市は、長野県の中央部に位置し、松本市に隣接する人口約6万5千人の都市である。南北に延びるJR中央本線・篠ノ井線や国道19号、長野自動車道など交通の要衝にあり、物流・産業・観光の面で発展を遂げてきた。 市の主要産業は、ワイン醸造をはじめとする農業・観光、さらには光学機器を中心とした精密工業であり、「ものづくり」と「食文化」の融合が特徴である。また、行政の先進的な取り組みにも定評があり、市民協働やICT活用、子育て支援など多方面でモデルとなる施策を展開している。 その中核施設の一つが、市民交流センター「えんぱーく」である。2010年に開館した本施設は、「知の交流と創造の場」を基本理念とし、図書館、産業振興、市民活動支援、子育て支援などの機能を備えた複合施設として、幅広い世代に親しまれている。		
	2. 考察（これらの取り組みを葎崎市にどう活かせるか）		
	塩尻市市民交流センター「えんぱーく」は、単なる複合公共施設ではなく、市民が自ら関わり、動き、居場所として育てていく“参加型の場”として成立していたことが、最も印象的であった。施設内のあらゆる仕組みにおいて、「どうすれば市民の自発性が引き出されるか」「どうすれば立ち寄りたくなるか」という視点が貫かれており、単に機能を並列した建物ではない、“生きた施設”として成立していた。		

特に、図書館を核とした施設構成が巧みに設計されており、本を読む・学ぶといった基本的な行動から、人と人とがつながり、活動が芽生えていくような動線と空間が丁寧に整備されていた。家具や照明、掲示、ちょっとした余白に至るまで、利用者が“わくわく”を感じられるような細部の工夫が施されており、まさに「市民の感性に應える公共空間」であった。

市が主体となり柔軟な運営が実現されており、“施設の主役は市民”という明確な姿勢が感じられた点も注目に値する。

韮崎市においても、「ニコリ」という立地に恵まれた拠点がすでに存在する今こそ、市民との関係性を再構築し、建物を通じて“まちの未来を共につくる場”へと昇華させていく視点が求められる。「えんぱーく」はその具体的なヒントを数多く示していた。

感想（まとめ）

「えんぱーく」を訪れ、まず感じたのは、施設全体に漂うあたたかさや活気、そして心地よい“わくわく感”であった。図書館を中心に、子どもから高齢者まで幅広い世代が思い思いに過ごす様子が見られ、市民一人ひとりの時間の使い方や関わり方を尊重する空間設計と運営の工夫に、深い感銘を受けた。

単なる“箱モノ”としての施設ではなく、市民をうまく巻き込みながら、利用者自身が空間の雰囲気をつくり出しているように感じられる点は、「えんぱーく」の大きな魅力である。建物の細部にまで丁寧な配慮がなされており、従来の図書館にありがちな“重苦しさ”とは異なり、風通しの良さと居心地の良さが両立していた点も印象的であった。

また、展示ブースの中には地元特産であるワインに関する紹介コーナーも設けられており、地域の産業や文化を日常の中で自然に発信する仕組みにも学ぶべき点が多いと感じた。こうした取り組みは、ワインのまちを掲げる韮崎市においても応用可能であると感じた。

このような市民との協働による場づくりのあり方は、公共施設の理想の一つである。韮崎市においても、既存施設の可能性を最大限に引き出し、市民にとって“使いたくなる・関わりたくなる”場となるよう、引き続き学びと対話を重ねていきたい。

